

市民主体の河川環境 再整備プロジェクト

～遠賀川・福岡県直方市～

柿原 ゆり

KAKIHARA Yuri

株式会社東京建設コンサルタント
九州支店/技術第一部

菅井 里子

SUGAI Satoko

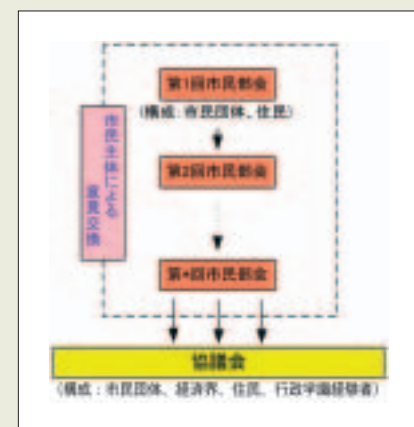
株式会社東京建設コンサルタント
本社/地域環境本部

1—はじめに

直方市は、福岡県の北部、遠賀川に沿って開ける筑豊平野のほぼ中央に位置する人口約6万人のまちです。このまちは、かつて筑豊炭田が隆盛だった頃、その中枢として繁栄しました。まちの中心市街地を形成する商業地域には古町、須崎町、明治町、殿町の4つの商店街があり、活気に満ちあふれていました。

しかしながら、近年は、石炭産業の衰退に伴う就業人口の減少だけでなく、モーターリゼーションの進展、市街地の高齢化や核家族化、郊外型大規模店舗の進出等により、商業地域の活力の低下や空洞化が進行しています。これは商業地域には無論のこと、直方市全体にとって非常に深刻な問題となっています。

このような状況の中、市の中心部



■図1—市民部会と協議会

を流れている遠賀川の河川空間を、まちの貴重な資産として位置づけ、まち全体の活性化のために活用することを目的とした河川環境を再整備するプロジェクトが進められています。本稿では、市民主体で進められているこのプロジェクトの概要について紹介します。

2—業務概要

遠賀川直方リバーサイドパーク（以下パーク）は、直方市中心部を流れる遠賀川の持つ広大な河川空間を対象として、潤いやゆとりのある都市環境づくり等を目指して整備が進められています。都市計画決定された面積約87haのうち、約35haの整備が完了し公園として供用されています。

当社では、遠賀川を管轄する国土交通省遠賀川河川事務所の委託業務の中で、パークの施設や利活用の現状及び課題について整理しました。そして、地域や市民の意見を反映させるための市民部会運営にファシリテータの立場で参画し、パーク整備のあるべき姿についてとりまとめました。さらに、策定された計画に基づき河川敷公園再整備に係る計画、設計を実施しました。

なお、市民部会運営にあたって、

学識者アドバイザーとしては、九州大学大学院工学研究院樋口明彦助教授に、模型の制作等運営実務においては、同大学建設設計工学研究室に協力いただきました。

3—ワークショップ運営上の課題と課題解決のための施策

(1) 市民部会の活用

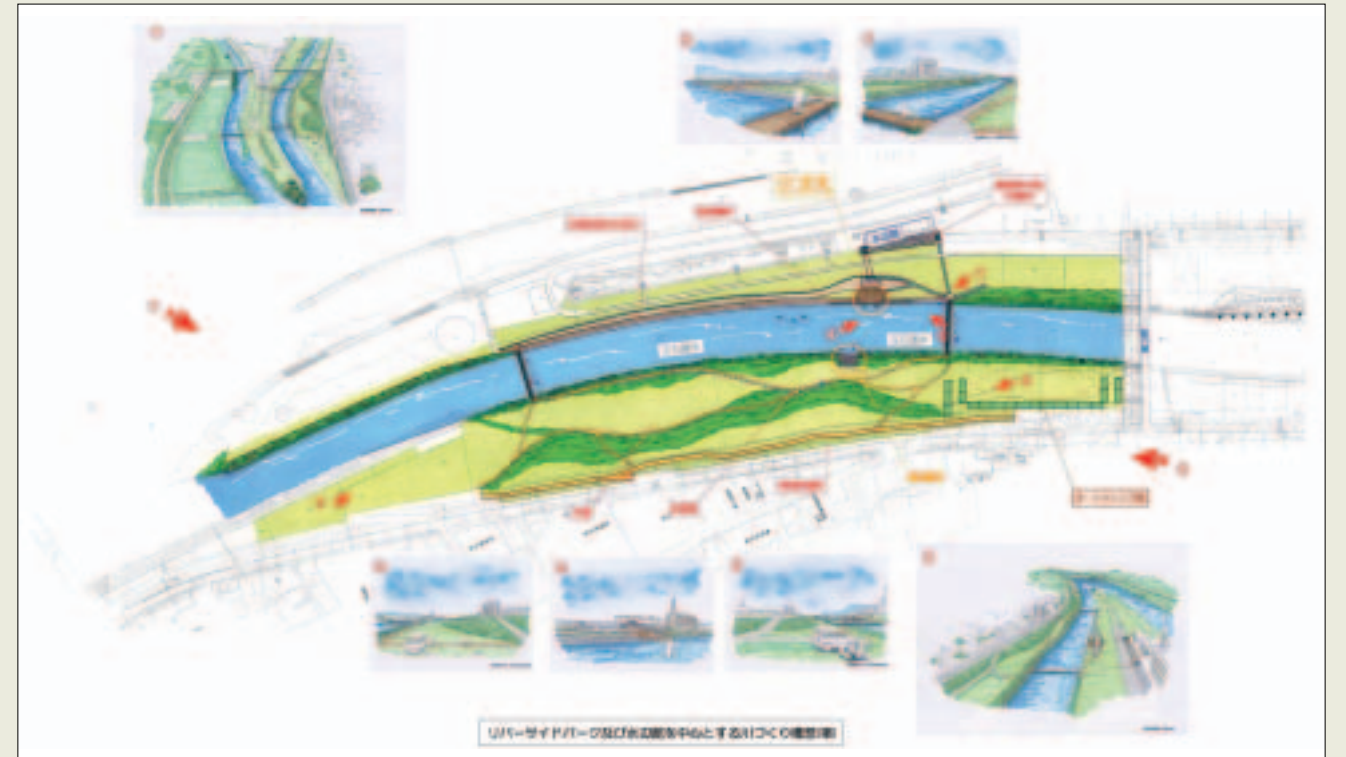
発足した協議会は、市民団体、経済界、住民、行政（直方市、国土交通省）という広い範囲の関係者で構成されていました。

パーク整備計画の見直しについて、最終的にこうした関係者間の合意形成を図ることは非常に重要なことです。ただし検討の過程は、日常的にパークを利活用している方々が主体となるのが適当であり、意見の発散を防ぐことが期待できます。

そこで、協議会の下に市民団体と住民が主体となり構成された市民部会を組織しました。そして、具体的な検討は市民部会でを行い、その結果を協議会に諮ることにして、協議会と市民部会を運営していくこととしました。

(2) 川とまちを一体のものとして検討する工夫

プロジェクトの目指すものは「まち



■図2—川づくり構想図

の活性化に繋がるような河川環境整備」です。そこで最初の市民部会では、パークを含む直方市中心市街全域の簡易模型を用意しました。

これにより、参加者に中心市街地、観光資源、公的主要施設、パーク等のそれぞれの位置関係を俯瞰してもらったこととしました。そして、通常時パーク利用者の動線、河川敷駐車場問題、パークにおけるイベント開催時の観光客誘致等、川とまちを一体と考え、活性化を図るための議論をしてもらえるように配慮しました。

(3) 粘土模型の活用

パーク見直し整備計画の検討については、パーク及び周辺の縮尺1/500の現況粘土模型と加工器具を用意した上で、参加者が直接、パークの将来のあるべき姿について造形するという企画をワークショップに取り入れました。

また、模型制作に使用する粘土には、数ヶ月間乾燥しないパテ材を採用することで、複数回における市民

部会で加工・修正の作業が行えるよう配慮しました。

さらに、粘土模型造形の課程では、小型CCDカメラにより、堤防道路上、河川公園内、水辺館等のビューポイントからの景観等を撮影し、パソコン及びプロジェクターを用いて大型スクリーンに投影しました。これにより、参加者間で景観に係る意見交換が活発に行われました。

(4) 合意形成を図るための工夫

まず、市民部会で作成した粘土模型に基づいて、スチレンで市民部会原案模型を作成しました。

現況のパークは、堤防の川表側法

尻から低水路のブロック積護岸までの平坦な高水敷部分を基本としています。これに対して市民部会案は、堤防天端からアンジュレーションを持たせた緩傾斜の高水敷とするとともに、低水護岸も緩傾斜として覆土することで、堤防から低水路までが一体の空間となるようデザインされています。

市民部会案の断面形状に基づいて、計画高水による流下能力照査を行ったところ、河道湾曲部における水位上昇が懸念されました。そこで、該当する部位のアンジュレーションの一部について、水位上昇が生じないレベルまで見直しを行いました。



■写真1—スチレン模型を用いての説明

■写真2—ワークショップの様子

■表1—整備前と整備後の変化

	整備前	整備後
写真		
左岸側	<ul style="list-style-type: none"> 水面との距離を遠ざけていた1:1.5のコンクリートブロック護岸の撤去 人工的なイメージが強かった水上ステージを撤去 	<ul style="list-style-type: none"> 水面まで近づくことのできる緩傾斜河岸 アンジュレーションのつけて変化に富んだ風景の創出
緩傾斜坂路	<ul style="list-style-type: none"> 高水敷からのアクセス方法は、1:1.6の階段のみ 	<ul style="list-style-type: none"> 乳母車や車椅子でも安全に利用できるスロープを設置 石工さんにより、丁寧に石積みが施されている
カヌー乗り場	<ul style="list-style-type: none"> 単調なコンクリート護岸が続く 	<ul style="list-style-type: none"> ウッドデッキが特徴的である。 スペースにゆとりがあるため、カヌー以外のイベントにも利用が可能である。

また、高木の植栽間隔を流下能力の阻害要因にならない程度に見直すとともに、直方市からの要望により、イベント開催や駐車場用地となる平場を設けました。

以上のような技術的な検討により策定した折衷案について、改めてスチレン模型を作成しました。そして、意見聴取するための市民部会では、市民部会案と折衷案の2つの模型を比較することとしました。比較に際しては、模型を並列に配置することで、市民部会案で不採用、あるいは手を加えられた部位について、対比しつつ説明することができました。このように、市民の声を反映しつつ、十分な合意形成が図れるように配慮しました。

4—再整備計画の概要

(1) 河川環境の整備

平成17年度の市民部会と協議会において川づくり構想を策定し、整備を行いました。川づくり構想を図2に示します。

整備内容については、下記のとおりです。

①パーク左岸高水敷

水面との距離を遠ざけていた1:1.5のコンクリートブロック護岸、人工的なイメージが強かった水上ステージを撤去し、水面ぎりぎりまで近づくことのできる緩傾斜としました。この時、単調な緩傾斜にするのではなく、アンジュレーションをつけることで、変化のある柔らかい景色を創出しました。また、高水敷内には散策路を設置していないことで、利用者は犬の散歩や自転車通行など、用途



■写真3—整備が終了した遠賀川水辺館前

によって思い思いの方向に進んでいくことができます。

②緩傾斜坂路

従来、高水敷からのアクセスは、1:1.6のきつい階段を利用するしかありませんでした。しかし、4%のスロープを設置することにより、高水敷に駐車し、スロープを通過して水辺館を訪れることができるようになりました。

③パーク右岸カヌー乗り場、高水敷

整備前は写真からもわかるように、



■図3—直方遠賀川魅力マップ(案)

■図4—直方遠賀川魅力マップ表紙(案)

1:1.5のコンクリート護岸が続き、水面はおろか、水際に近づくことも危険でした。しかし、中段広場を設けた籬壇型のカヌー乗り場とすることで、より親水性の高いものとなりました。また、カヌー乗り場にはウッドデッキを採用しました。

5—イベント

平成18年6月11日、カヌー乗り場完成を記念して、カヌー教室が行われました。中段の広場で、カヌー指導者による準備運動、カヌーの操作方法、注意事項等の指導が行われました。進水の時を迎えた参加者たちは、普段見ることのない水面からの景色を堪能していました。

平成18年10月22日には、国交省、流域市町村、地元住民でつくる実行委員が主催して「わくわく夢フェスタ」が開かれました。カヌー体験はもとより、ペーロン大会、物産市、



■写真4—カヌー教室を楽しむ人々

そしてステージでは数々のパフォーマンスが行われ、水辺は家族連れなど多くの人で賑わいました。その様子が新聞にも取りあげられました。

6—川づくりを核とした街づくりとの連携

河川環境の整備も完成に近づくこととして、遠賀川、水辺館および中心市街地の回遊性を高めることを目的とした動線計画・サイン計画を市民部会で話し合いました。

ここでも当初作成した市街地模型を使用しました。図3と図4で示す「直方遠賀川魅力マップ」は、これまで市民部会で検討した動線計画を踏まえて、直方市の魅力をたっぷりPRするための手段のひとつとして作成しました。まだまだ作成段階ですが、将来的には、サイン計画・動線計画を踏襲したりパーツリズムを



■写真5—動線計画・サイン計画の検討

作り上げ、イベントや直方市の情報満載のこの地図を見ながら、たくさんの人々が訪れてくれることを期待しています。

7—今後の取り組み

平成16年度から17年度は、協議会や市民部会の立ち上げと、まちの活性化を念頭に置いたパーク整備のあるべき姿の策定がメインテーマでした。

平成17年度末から平成18年度には、再整備計画に基づき、カヌー乗り場の整備、低水護岸の改良等を主体とした施設整備を具体化しました。

今後の活動では、川を自らの地域の資産と考え、永続的に検討していくとともに、ソフト面も含めた必要な施策を着実に実現することが必要です。

- ①パークを含む川の維持管理のあり方(住民参画・アダプト制度等)
- ②市街地サイン、景観等、川とまちを一体に考えたまちづくりの推進
- ③パークの地震時避難空間としての活用等、地域防災、減災のための活用方法

そして、以上に示すような課題に取り組み、まちの活性化に寄与していくことが期待されています。